

解を示し、慶長7年（1602）6月に奉行を派遣して、正倉修理の事前調査を行い、翌8年2月から8月にかけて修理を実施している。

江戸時代には、その後も数回にわたって大規模な修理が行われた。元禄6年（1693）4月から7月にかけての修理では、瓦の葺き替えのほか、床下束柱のうち亀裂等が顕著なものに鉄のタガが巻かれ、また盤木の鼻には銅板が被せられた。これらの修理は現在の正倉にみることができ。その後、文政13年（1830）に正倉の屋根が大破する事態が生じると、天保4年（1833）の開封を経て、同6年9月から同7年3月にかけて、正倉本体の工事と屋根の葺き替え修理が実施された。

近代の修理 明治時代に入ると、明治5年（1872）にいわゆる壬申調査があり、宝物の点検と調査が行われた。明治8年（1875）に正倉ならびに正倉院宝物が国の管理となると、同10年6月から翌11年3月にかけて、正倉を囲う木柵や避雷針などの設備が設けられた。その後、明治15年（1882）8月には軒先を支える仮設の柱の取り替えなどが行われている。なお、明治13年（1880）伊藤博文の建議により、正倉内にガラス扉付の宝物陳列棚を設けることが決まり、同15年10月に完成した。このときの棚は現在も正倉内に残されている。

大正2年（1913）3月から12月にかけて、正倉内の全ての宝物を仮庫その他の建物に移し、初めて正倉の全面解体修理が実施された。屋根の修理のほか、軒先の垂れ下がりなどの問題に対し、洋式の小屋組（屋根を支える構造）を導入することにより、建築的な強度を増す措置がとられた。

戦後、新しく近代的な宝庫が完成したことをうけて、正倉にあった宝物は、昭和35年（1960）までに、一部の唐櫃を除いて全て取り出された。現在は、空調設備のある西宝庫（昭和37年竣工）、東宝庫（昭和28年竣工）が宝物の収納・保存の役割を担っている。その後、平成9年（1997）には国宝に指定され、さらに翌年には「古都奈良の文化財」として世界遺産に登録されている。

現在（工事前）の状況

①屋根 大正2年の修理以来、約100年が経過しており、経年による瓦の破損、瓦を固定する葺土の流出、瓦のずれなどが見られる。現在、雨漏りは生じていないが、経年による瓦の破損は、屋根下地への影響が懸念される状態である。

②小屋組 変形をおこしている箇所があり、大正修理で追加された金具類も一部緩みを生じている。これらが原因となって、軒廻りの乱れを生じさせている。

③内部 経年による風化が進んだ外側に比べると、校木の内側、床板など当初材も、内部では全体に健全である。

【間口約33m、奥行約9.4m、床下約2.7m、総高約14m】

8. 工事内容

① 屋根

瓦はすべて丁寧に取り卸し、目視及び打音検査により再用・不再用の選別を行う。

補足瓦の形状は天平期の瓦に倣い製作する。瓦の葺き方は、再用古瓦と伝統製法で製作した補足瓦については、湿式工法（土葺）、現代製法で製作した補足瓦については、乾式工法（空葺）で葺く計画である。

土居葺の改修は、小屋組補強に伴い野地板を解体する部分及び腐食破損部分について取り替える。

② 小屋組

出梁の両脇に桔木を補足して丸桁が現状以上に垂下しないように補強する計画である。

③ 軸組

校木組に隙間のある部分は、校木間に埋木を施す。

9. 工事の流れ

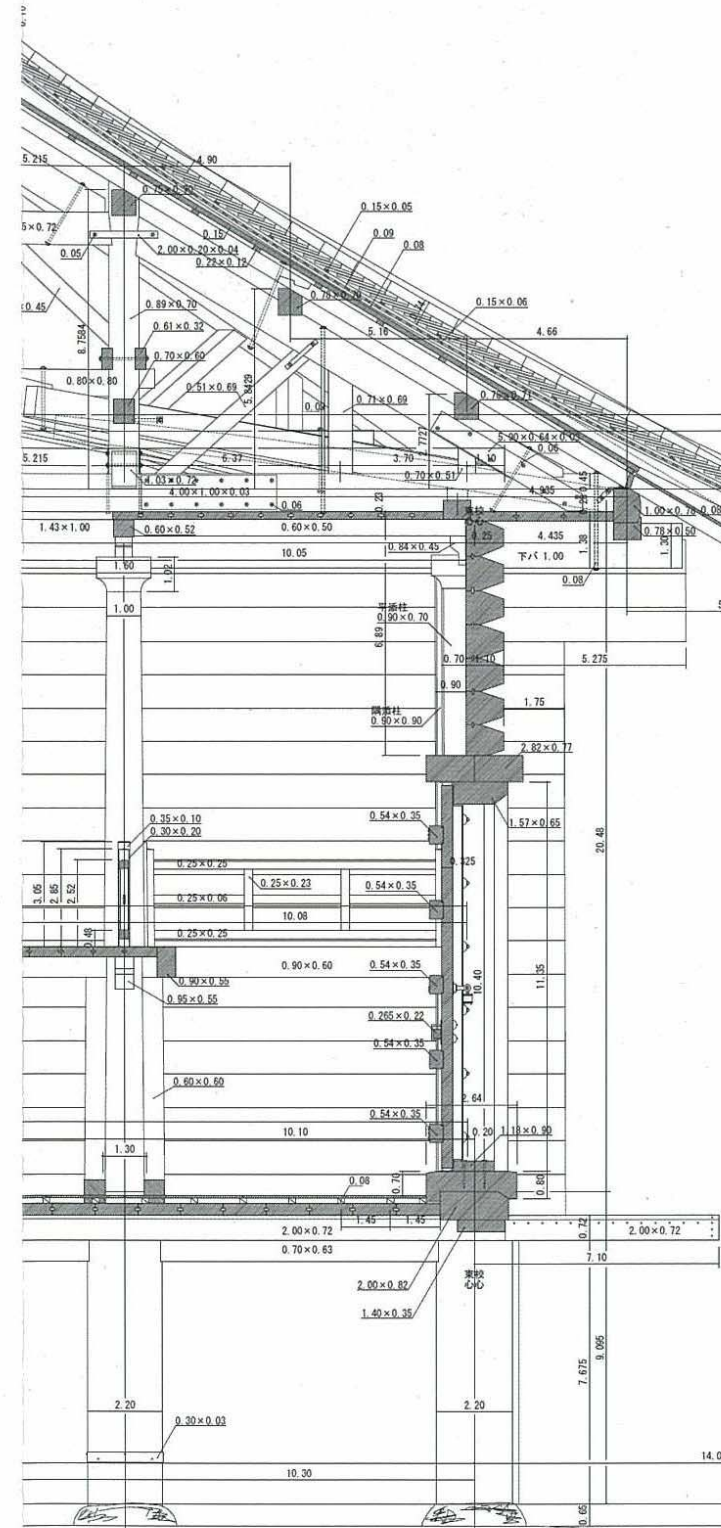
平成23年	10月	素屋根建設
平成24年	3月	第1回現場公開
	4月	正倉本体の工事開始 屋根工事 瓦撤去、選別・清掃 土居葺一部撤去 補足瓦製作開始
	9月	小屋組構造補強工事
平成25年	6月	屋根工事 土居葺復旧 瓦葺き
平成26年	1月	内部復旧 正倉の工事終了
	4月	素屋根解体、周辺復旧
	11月	正倉外構公開再開（予定）

守っていただきたいこと

- 触らないで 正倉に触れるのはご遠慮ください。
- 写真撮影 建造物や展示品は撮影できます。ただし三脚の使用はご遠慮ください。
- 飲食・喫煙 正倉院敷地内での飲食はご遠慮ください。また、敷地内は禁煙です。

正倉院正倉整備工事

第1回現場公開



開催日 平成24年3月16日～18日

主催者 宮内庁京都事務所

宮内庁正倉院事務所

<http://www.kunaicho.go.jp/>



1. 建物の修理の歴史

正倉とは 正倉院正倉は、奈良時代創建の東大寺の倉庫のうちの一つであり、北倉、中倉、南倉の三倉が集合する一棟三倉形式の建造物である。創建年代を直接示す記録はないが、ほぼ天平勝宝8歳（756）頃には成立していたと考えられる。天平勝宝8歳は聖武天皇が崩御された年で、その七七忌にあたる6月21日に光明皇后が聖武天皇のゆかりの品々を東大寺大仏に献納し、正倉院宝物の始まりとなった。

北倉は聖武天皇御遺愛品が納まり、当初から開扉に勅許を要する倉、すなわち勅封倉であった。また、中倉も平安時代中頃までには勅封倉になっている。南倉のみは長らく網封倉であり、僧綱（のち東大寺三綱）が管理する倉であったが、明治8年（1875）に正倉および正倉院宝物が国の管理下に置かれるに至り、三倉とも勅封倉となった。

修理の歴史 正倉の修理あるいは修理が行われた可能性を示す出来事は、風雨や盗難による被害の確認、宝物点検な記録に残るだけでも20数回認められる。もっとも早い時期のものは、平安時代中期の天禄2年（971）頃の修理である。天喜5年（1057）東大寺の建造物に対して総合的な修理が実施された際には、11日間かけて南倉が修理され、瓦約5000枚が葺き替えられた。また、北倉の瓦約200枚が1日で葺き替えられている。

鎌倉時代には、大規模な修理が幾度か行われた。勅封倉（北倉・中倉）の雨漏りにより、建久4年（1193）8月から同5年3月にかけて、また、寛元元年（1243）閏7月から同4年9月にかけて、修理が実施された。いずれも宝物を他倉に移しての本格的な修理であった。建長6年（1254）6月、北倉扉付近に落雷があり、火の手があがった。幸いにも大事に至らずに消火できたが、建物の被害は甚大で、7月にはその際に破損した北倉および中倉の扉や束柱6本などの交換・修理が行われた。

室町時代・安土桃山時代には、足利将軍や織田信長などによる宝物拝観とそれに伴う正倉の開封の記録が残されているが、修理に関するものは見当たらない。徳川家康は正倉院宝物ならびに正倉の保存に深い理

2. 内部



■ 正倉内部。明治時代に作られた宝物陳列棚の内外のスペースに、宝物がかつて納めていた唐櫃（からびつ）が置かれています（工事に伴って移納）。唐櫃はスギ材で作られ、容器内の湿度変動を抑えて保存に適した環境となっています。

3. 瓦



↑ 正倉院周辺から出土している瓦のなかで、正倉の創建年代に近く、数多く採集された軒瓦

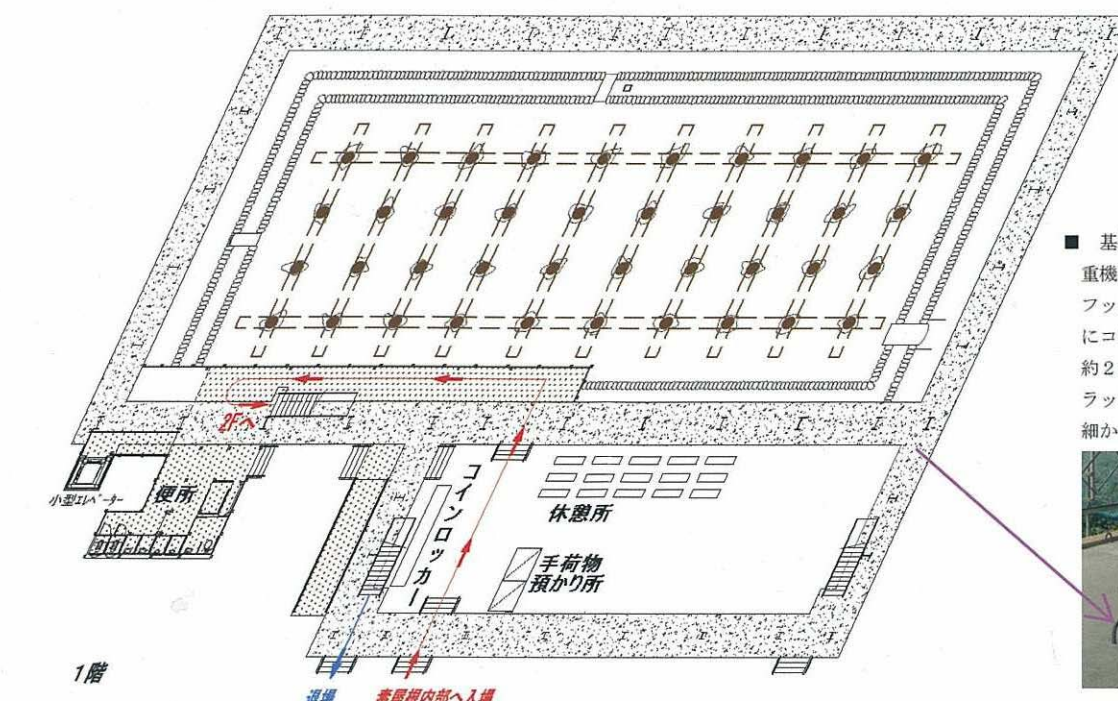
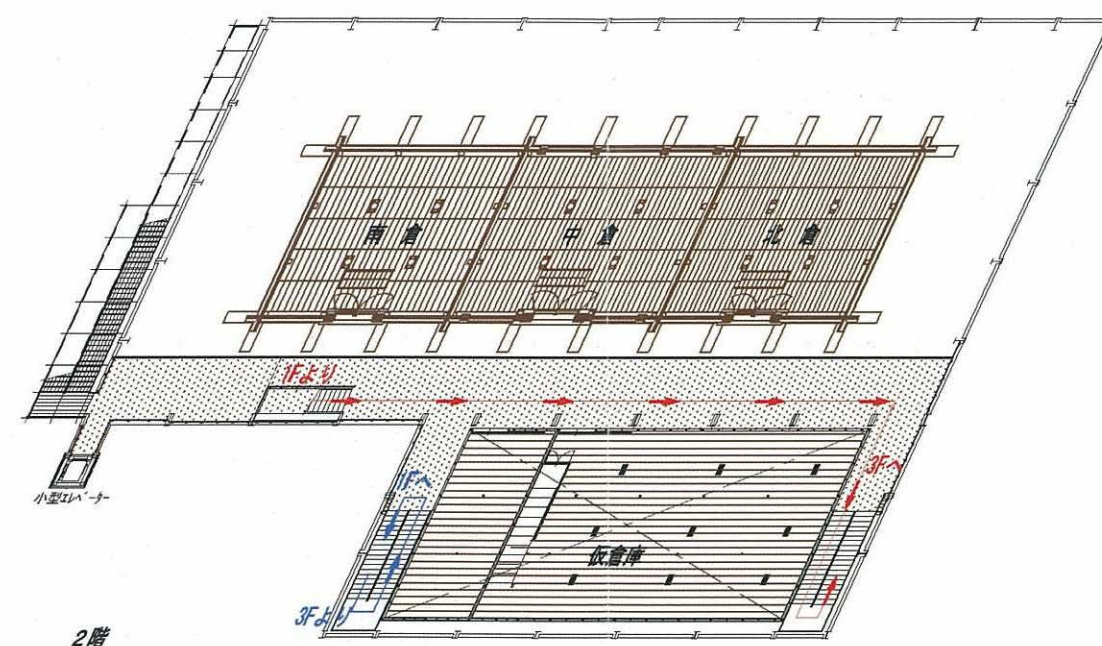
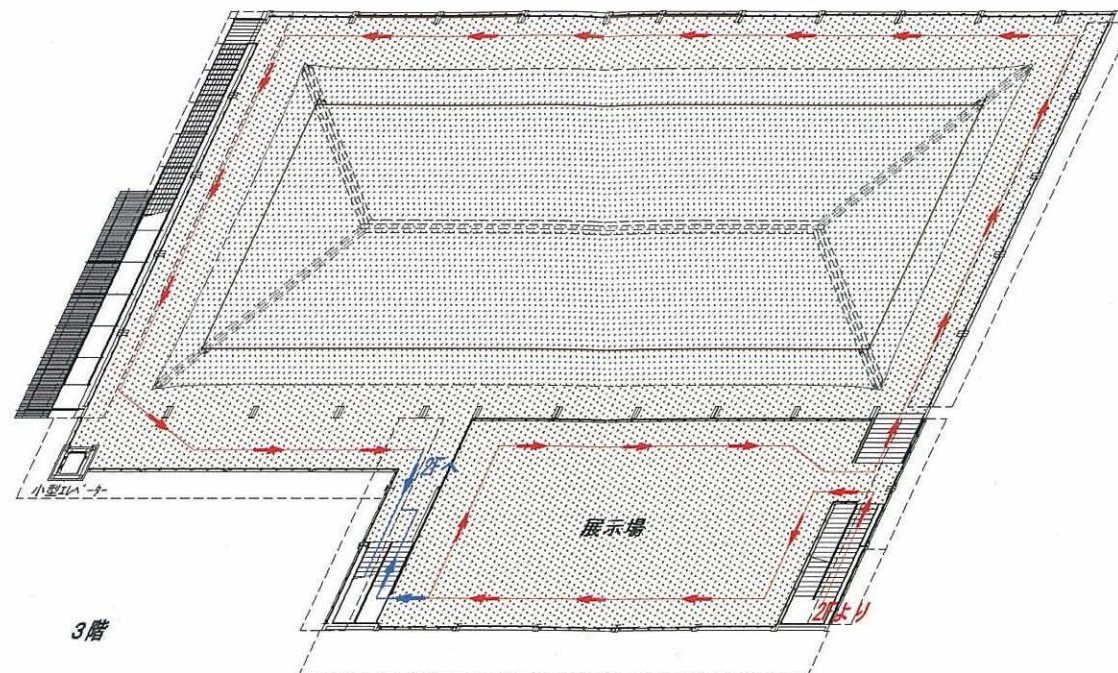
■ 屋根には創建当時の天平時代から鎌倉、室町、江戸、明治および大正時代に作成された瓦が葺かれています。今回の修理では、一点ずつ検査を行って再使用できる瓦を選別するほか、天平時代の瓦を参考に、新たに補足する瓦の文様を決定しました。

4. 校倉



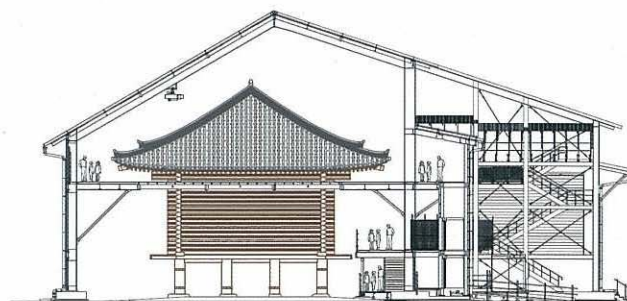
■ 三角形断面の校木（あぜぎ）を井桁（いげた）に積み上げ、壁をつくる形式を校倉造りと呼びます。
北倉内部には黒く焦げた跡が残っていますが、これは鎌倉時代の落雷のなごりです。

5. 見学ルート



■ 基礎フック
重機で吊り上げるためのフックで、素屋根解体時にコンクリート基礎部を約2m角に切断して、トラックで搬出、工場にて細かくできます。

6. 素屋根及び工事概要



■ 素屋根
正倉を保護するために素屋根で全体を覆います。併せて一般の見学者の通路としても供用可能な作業デッキを設けます。

■ 素屋根の概要
鉄骨構造 鉄骨の使用重量 約360トン
大きさ 約35m×約48m 高さ 19m

■ 工事概要
工期 平成23年8月～平成26年10月
主な工事 瓦の葺替え（約37,000枚）

7. 素屋根ができるまで

